

SCG081-01

会場:国際会議室

時間: 5月24日13:45-13:55

兵庫県南部地震から15年：教訓，その後の研究の進展そして展望 — 趣旨説明に代えて—

15 years since the Hyogoken Nambu (Kobe) Earthquake: purpose of the session

干場 充之^{1*}, 香川 敬生², 隈元 崇³, 堀川 晴央⁴

Mitsuyuki Hoshiba^{1*}, Takao Kagawa², Takashi Kumamoto³, Haruo Horikawa⁴

¹気象研究所, ²鳥取大学大学院工学研究科, ³岡山大学理学部地球科学科, ⁴産業技術総合研究所

¹Meteorological Research Institute, ²Tottori University, ³Okayama University, ⁴AIST

兵庫県南部地震の発生により，死者，行方不明者6437名の犠牲者を出した阪神・淡路大震災から15年が経過した。この震災の衝撃は，わが国の地震に対する考え方を一変させたといっても良いであろう。兵庫県南部地震の前は，都市を跨ぐ活断層を意識することも多くはなく，また，「関西には地震がない」との誤解が漠然と信じられてきた。それが，この地震により，田んぼの中に突如出現した野島断層は「活断層」というものの存在を広く知らしめることとなり，さらに，その様な活断層が全国至る所にあるということが広く認識されるようになった。さらに，崩れた民家の様子は，地震時の揺れの強さのイメージを変えた，といっても良いだろう。

政策も大きく変わった。地震防災対策特別措置法が施行され，それにより地震調査研究推進本部が設置された。地震の観測，測量，調査および研究の推進について基本方針の策定，それにも基づく基盤観測網の整備・充実が行われ，全国主要98断層の調査と地震の揺れの強さの予測が行われた。その結果は地震動予測地図としてまとめられている。また，その成果を如何に社会に還元するか，について検討されてきた。このように，それまで「地震研究」というと単に「地震予知」と捉えられることが多かったが，その後は観測網の整備，活断層の調査や地震動の予測などの研究，そしてそれらの結果の普及などにも力が入られるようになった。

そして，その後わが国では2004年の新潟県中越地震や2008年の岩手・宮城内陸地震など，内陸の地震が多く発生した。これらの地震では兵庫県南部地震の時に得た教訓はどのように生かされ，あるいは再認識されたのだろうか。また，新たに認識された課題は何なのか，そして，今後，何をどのように解明していかなければならないのか。これらの点を，兵庫県南部地震15年という節目の年に考えてみたい。このような背景のもと，日本地震学会強震動委員会と日本活断層学会の共同提案をうけて，本セッション「兵庫県南部地震の教訓とその後15年の研究：進展と展望」を開催することとなった。

本セッションでは，招待講演として，この15年間，国としてどのように地震の調査研究を進めてきたか，活断層の研究はどのように進んできたか，大地震の揺れの予測はどこまでできるようになったか，についてのレビューをお願いしている。また，地震直後の情報はどのように変わってきたか，観測網はどのように充実したか，断層の連動や規模についてはどう考えるべきなのか，について報告をお願いしている。さらに，研究者と市民をつなげる活動はどう行われてきたか，について紹介してもらおう予定である。

活断層や強震動から教育や普及活動までを含んで，地震防災に関して幅広い議論をしていきたい。

Keywords: Hyogoken Nambu Earthquake, Kobe Earthquake, 15years, active faults, strong ground motion, outreach